ピュートーンさん！？d×d

塩で美味しくいただかれそうなサンマ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

エロメ…ゲフンゲフン！シャドウバースという本格スマホカードバトル（）において、糞カ…ゲフンゲフン！ゴミ（直球）と揶揄されるあのカード。

演出はクソかっこいい。イラストも完璧。（個人の意見です）

だけど尖りすぎて弱すぎなあの人。

はい、ピュートーンさんです。

そんなピュートーンさんをクソ強にして活躍させたいという欲望ダダ漏れな作品です。

安易な転生オリ主ものになりますがご容赦ください。

最後に、ピュートーンさんほんとゴミ性能だよね。でも好きだよ。

目次

第1話　プロローグ　1
第2話　逃れられぬ運命　4
第3話　一番大切な言葉　8
第4話　目覚め　13
第5話　選択の自由　16
第6話　必然　19
第7話　妄想理想夢幻　23
第8話　逆鱗　27

第1話　プロローグ

暗い場所で眼を覚ます。
どこか暖かい泥が体全体を包んでいる。
ふと、意識が覚醒する。
転生した、そう理解した。
いや、それだけではない。
自分が何者か、この世界は何か、その原理は何か。
自己の使命、世界の運命、何もかも。
全てを、真理を、目覚めのまどろみも感じぬその刹那の間に。
理解した。
「キュオオオオォォ！」
天蛇の咆哮がこだまする。
洪水の泥の中から重たい首を持ち上げ鳴くその蛇には。
天から薄雲の間を抜けて神聖な光が降り注ぐ。
天蛇の体から雷霆が地の果てまで広がっていく。
それは天蛇による宣告。
その瞬間、世界の運命は全て、《定まった》。

ギリシア神話において、デルフォイの神託所の番人とも、またはそこで神託を授けていたともいわれる大蛇。
名をピュートーン。
それに転生した。

なんの前触れもなかった。
自分は本当にただの男子高校生だ。
いつも通り部活を終えて帰って、そしていつも通り、シャドウバースをしてから寝ただけだったんだが…
シャドウバース…もう辞めようかななんて思いながら寝たなそういや。
普通にやるとクソゲーだけどネタデッキ作って友達とやりあう分にはそこそこ楽しいんだよな。

普通の、なんの取り柄もない凡夫が異世界転生を果たすというお約束展開。
まさか自分がそんなものに巻き込まれるとは思ってなかった。
確かにいつも生活していてあったらいいなぁ…と、何回も願ったものだ。
そして、今思う。
ふざけるな。
今理解する。
《無知》故の《幸福》を。
ピュートーンの誕生から何千年が過ぎただろうか。
世界ではいろいろなことが起きた。
災いも救いも、その両方を含めて数え切れないほど。
中には「奇跡」と呼ばれる事象もあった。
だが…その全てを知っている、確定させた俺には…虚しさだけしかなかった。
《神》という人が及ばぬ領域に、《人の精神性》のまま到達したらどうなるであろうか。
答えは簡単。
精神の崩壊である。
強すぎる力、大きすぎる責務。
そのようなものに心は摩耗し、精神はいつしか何も感じなくなる。

とりわけその青年は不幸であったのだろう。
なにせ転生先が「ピュートーン　」だったのだから。
「ピュートーン　」は、神託と運命の天蛇。
全てを知り、全ての運命を定め、そして神託を与えるとされる神。
《全てを知る》という苦痛を、《運命を定める》という苦痛を、精神が人間である彼に耐えられるはずがない。
哀れな天蛇は今日もデルフォイにて神託を下す。
神の〝力〟を持っていても神の〝心〟を持っていないその天蛇。
それは使命と運命に流されて生きる傀儡であった。

第2話　逃れられぬ運命

いったい何人の人がここを訪れただろうか。
朝が早く、うっすらと窓から陽の光が入り始めたばかりの薄寒い神託所の真ん中にとぐろを巻きながら心で思う。
いや、知っている。
それは知っている。
この神託所が無くなるまでに来る人の数も既に知っている。
じゃあ、いったいどれだけの神が私の元をおとずれたろうか。
知っている。
そう、知っている。
当たり前のことだろう。
俺に、知らないことはない。
いつもと同じ結末。
悲しいことだ。
知らないことを探してみるがそんなものはない。
いつも絶望に苛まれるだけ。
いや、それすらも《運命》なのだ。
神託所の真ん中で小さくため息をつく。
神託所の中に収まるよう、体を縮めて本当にただの小さな蛇と化しているため、その吐息はかすかなものだった。
「ピュートーン様？お気分が優れないでしょうか？」
「エアルか。大丈夫だ。心配をかけたな。」
そう、これも知っている。
ため息をついたら巫女のエアルが心配してやって来ると。
エアルは良い子だ。
黒髪、碧眼の整った目鼻立ちの巫女である。
敬虔な信者で気立てが良く、俺の世話を良くしてくれる。
長年過ごして精神がもう虚ろな俺とも、諦観と冷たさを滲み出す俺とも、全てを既知という理由を持って拒絶するおれとも、面倒臭がらず接してくれる良い子だ。

神託所の中では俺は「冷徹な神」として評判を受けてるからな。
「そうですか。あぁ、そういえば今日は予言者がいらっしゃるようですよ。何やらピュートーン様に伝えたいことがあるのだとか。」
「そうか。ありがとう。だが、知っていたよ。」
「ええ、そう仰るのも分かってました。どうせ話し相手が欲しかったんでしょう?さぁ、話しましょう?」
「…いつもすまないな。」
本当に優しい娘だ。
しかし残酷かな。
その会話はとてもつまらなかった。
気がまぎれるなんてこともなくむしろもっと辛くなった。
暇つぶしのためにするその会話でさえも、《運命》であり《必然》であり、知っていたから。

「ピュートーン様、隠し事はあなたには無駄でしょう。なので、率直に申し上げます。無礼は許してくださるとありがたいです。覚悟は…大丈夫でしょうか?」
予言者が恭しい口調でそう言葉を発する。
なんとも言いにくそうな、しかし言うべきであると大きい覚悟を持っているといった感じだ。
まぁ、そうだろうなと1人納得する。
なにせ、その予言の内容も、《知っている》のだから。
まぁ、予言者の口から聞くことも一興だろう。
「良い、話してくれ。」
「分かりました。…すぅー、はぁー。…」
予言者が深呼吸をする。
「ピュートーン様、あなたはレートーの子によって殺されます。」

「そうか。」
予言者の声が神託所を突き刺す。
神託所内の空気は凍った。
まぁ、それはそうだろうな。
目の前の強大な存在が死ぬと言われれば驚愕するほかないだろう。
しかもそれに全く反応を返さない主神ときたものだ。
巫女たちはみな、こちらを唖然としながら見る。
予想通りすぎてあくびも出ない。
「……ピュートーン様は…驚かれにならないのですね。」
「そうだな。それが予言なのであれば、《運命》なのだろう。ならば抗う術もなし。抗う気もないさ。所詮、俺も一つの命に過ぎない。」
「そんな…!ピュートーン様!そんなことを仰らないでください!ピュートーン様ならどうにかできるんじゃないでしょうか!?」
エアルが叫んでこちらに向かってくる。
その顔は涙でぐしゃぐしゃだ。
可哀想に。
まぁ、知っていたけども。
どうにもできないのだ。
俺には。
運命というのは、実際に《不変》というわけではない。
というよりは一部だけ変化可能であるといえる。
運命は、大筋が決まっていてそれまでの細かな筋書きはあまり決まっていない。
つまりその筋書き部分はいかようにも変えられるということだ。
しかし、それは逆に…
大筋にはどうやっても逆らえないことを意味している。
この、俺の死からも…な。
エアルがこちらにダイブして泣きついてくる。
蛇体でもって受け止めて、優しく包み込んでやる。
とても暖かい。
「エアル、そんな泣かないでくれ。大丈夫だ。ここの神託所にはもっ

と頼り甲斐のある神様が来る。」
「違うのです！嫌なのです！ピュートーン様じゃないと嫌なのです！」

…心が痛い。
運命をつかさどる神。
神託を授ける神。
全ての運命は彼が定める。
ピュートーンはそんな風に言われるがその実どうだろうか。
ピュートーンは、運命を定めるわけではない。
運命を《知って》、《宣告する》だけである。
ピュートーンという悲壮な魔物は。

《運命》という絶望を何よりも知っている獣なのだ。

第3話　一番大切な言葉

《運命》とはなんだろうか。
その問いに答える人は誰しもこう言うだろう。
「それはピュートーンの神託である。」と…
それは間違いではない。
事実ピュートーン自身もそう言われても異論はないと言う。
しかし、ピュートーンと、その他の存在において、この言葉の解釈は大きな相違を見せる。
その他の存在からはそのまま言葉の通り、物事の運命は全て、ピュートーンが決めているという意味である。
しかしピュートーンの言葉の意味は「《運命》は元から決まっている。それを《宣告》する事で実現させるのが私なのだ。」と。
そういう意味であろう。
運命というのは、ピュートーンが神託として紡いだ時、初めて効力を成すのだ。
運命とは無数の道である。
無数の〝決められた〟物事の成り行きを旅人が選んで行くものだ。
それまでは先行きの予測できないものであり、だからこそ《偶然》というものが存在する。
しかし、ピュートーンが《宣告》したとき、それは全て《必然》となる。
旅人の行く先にある結末が定まってしまう。
そこにピュートーンの意思などない。
あるのは大いなる力の不可視の存在だけである。

予言者が来てから幾日目かの夜。
真夜中の神託所の中で、矢を受けて死にかけの巫女と、それに寄り

添う天蛇が静かに会話をしていた。
神託所の窓は閉められていて光など入らない。
「エアル…なぜこんなことを…」
「ピュー、トー、っン様…申し訳、あり、ごほっごぶっ…」
「良い、もう良い。もう話すな。傷に触る。そして…理由も知っている。そなたの顔を見たその瞬間にな。」
俺は運命を生まれた時に全て知った。
無数に広がっている〝道筋〟まで全てだ。
しかし結末は同じでも過程が変化することは往々としてある。
俺の《神託》は所詮結末を決定するものだからな。
そういう行動で変化する細かな運命は…
その運命に関わる人物や、事象を見ることで理解する。
エアルは…俺のためにレートーを殺そうとしたらしい。
無謀なことだ。
人間の身で神に立ち向かおうなどとは。
しかし、ヘラが加勢したからレートーを追い詰めることに成功したらしい。
が、ゼウスとポセイドンの協力によりレートーは子を産むことに成功。
そしてその子達が弓を持って俺とエアルに復讐しに来ているということらしい。
「すまない…エアル…俺には、昔みたいにお前を助けることができん。それが運命、神託だからだ。ここでお前に永遠の命を授けてやることもできる。だが、その場合お前は死よりも辛い運命を背負うことになる。だから…助けてやれん。すまん…すまん…」
俺はエアルにそう懺悔する。
今までの悔恨も含めた切な言葉である。
と、エアルがその震える手をこちらに伸ばし、顎を撫でてきた。
下げていた頭をあげてそちらを見ると微笑んだエアルがいた。
血だらけのその姿は、神神しくも儚く、残酷である。
そして、最後の力を振り絞るかのように、この言葉だけは途切れさ

せないと、そう覚悟を持って言葉を放つ。
「ピュートーン様。あなたは私がこれから言うことも知っているでしょう？でも、言葉にします。しないと意味がありません。ピュートーン様、貴方は…」
そこで、エアルはこと切れた。
エアルの体はみるみる冷たくなる。
そういう《運命》だった。
そういう《結末》だった。
だから俺は、エアルがあの後紡ごうとした言葉を知らない。
エアルが途中でこと切れて、言葉を最後まで発しないことは知っていたけども、一番、俺が知りたいその言葉を、親愛なる人からの最後のメッセージを、知らない。
真理も、運命も、何もかも知っておきながら。
全能だのなんだのと謳われておきながら。
一番大切なはずの、その言葉を知ることができない。
「エアル…エアル…！目を開けてくれ…無知な俺に…その言葉を教えてくれ……！」
天蛇の悲痛な鳴き声が神託所にこだました。

その後、真っ暗な神託所に２人の神が入ってきた。
コツコツと小さな足音が天蛇に寄る。
「君たちが…アポロンとアルテミスだな？」
しわがれた声で天蛇が尋ねると、その２人は驚いた。
と、男の方が天蛇に尋ねる。

「なぜ知っている？」
「なぜか？まぁ、おれはピュートーンだからな。理由はそれでいいだろう。」
「…なるほど。ならばなぜ俺たちがきたかも分かっているな？」
「あぁ、知っているとも。」
２人はゼウスとレートーの子。
アポロンとアルテミスだ。
とても、たいそうな、幸せな運命を持ってるじゃないか。
それに、アルテミスに至ってはエアルを殺した矢を放った張本人である。
そう理解して、天蛇の中にある感情が生まれる。
嫉妬と、憎悪。
天蛇が小さくぼやく。
「なぜだろうな。」
「なんだいきなり。」
「エアルはな、俺が昔助けた娘だ。両親に捨てられててな。それこそ親子のように過ごしてきたよ。悠久の時の中で一番心を許した子だった。とてもいい娘だった。」
「俺たちはそのいい娘に苦しめられたけどな！」
「あぁ…そうだったな。」
天蛇は、諦めている。
嫉妬も、憎悪も、感じていても。
また、それも《運命》。
「なぜ…エアルのような不幸で、だけどもがいて、善く生きてきた子に辛い運命が待っとるんだろうな。」
「分からん。」
「…まぁ、そうだろうな。殺すなら一思いにやってくれ。そして…この子と、エアルと一緒に手厚く埋葬してくれまいか？」
「…分かった。いいだろう。じゃあ死ね。」
アポロンの矢が天蛇を貫いた。
その矢は煌々と輝き、暗闇に塗りつぶされた神託所を照らす。

矢の衝撃で神託所の窓が開いた。
強い光が神託所から漏れて真夜中の空を真っ直ぐに飛び去っていく。

きっとその光は天蛇の嘆きだろう。
そして、この夜は…
《運命》が《必然》で無くなった夜。
つまりは人の時代の訪れであったろう。

第４話　目覚め

あぁ…知っていた。
この感覚は目覚めだ。
そう、死という眠りから、安息から起こされる。
知っていたさ。
また、つまらない世界が待っていることなんて。
知っていたよ。
まぶたをゆっくりと開ける。
その先には薄明かりと、そして1人の神がいた。
身じろぎしつつ問いを放つ。
「…何用かな？アポロンよ。今更私のとこに来て何を求む？いや、知っているとも。知っているさ。また、神託を授ける神となれと、そう言うのだろう？」
「…あぁ、そうだ。あなたはとっくに私の事情も、何もかも理解しているらしいな。愚かだろう？本当に、俺は愚かだ。」
アポロンは、俺を殺したあと、おれとの約束に従ってエアルと俺をここ、世界の中心に手厚く埋葬した。
その後、デルフォイの神託所で俺の代わりに神託を授ける神となった。
しかし、彼にはその役目を務める資格がなかった。
彼には、告げた《運命》を《必然》にする力が無かった。
神託所で後継を務めているが、失敗も多かったのだろう。
そして、自分の非を見つめて頼りに来たと。
「そうか…そうだな、アポロン。お前は愚かだな。だが、殊勝ではある。自己の非を見て正しい行動ができるのは良いことだ。少なくともゼウスやポセイドン、ハーデスあたりの他の神々にはできんお前だけの魅力だろうさ。」
「あなたは…私を責めないのですか？あなたの愛する人を殺し、あなたを殺し、それなのに醜くあなたに泣きついてあなたを生き返らせ、

また過酷に戻そうとする私を…許すのですか？」
彼も、神託の神という役職の辛さを味わったようだ。
申し訳なさからか口調も丁寧になっている。
まぁ、運命を確定できないだけ俺よりはマシであろうが。
俺の神託は、願いも努力も行動も何もかも《運命》の名の下に否定するからな。
「それもまた、《運命》だろうさ。アポロンよ。」
「運命…ですか…」
「あぁ。それと悪いが、俺はまたその役目につくつもりはない。」
「なっ！何故!?力は残っているはずだ！」
「そうだな。それも《運命》だと言っておこう。アポロン、お主には辛いことであるかもしれない。過酷であるかもしれない。だがな、お前が神託の神となった今の世界は、俺が神託の神であった頃よりかなり良い世界だよ。」
いま、この世界において神託とは道しるべ。
予言のようなもの。
俺の担った代では絶大な力を持ったそれも今やただの戯言でしかない。
いま、この世界において《運命》とは不確定である。
大筋だろうが細部だろうが変化する流動的なものになった。
結末が分からないものとなった。
それでいい、それがいいのだ。
何があっても、結果が決まっている世界なんてつまらないに決まっている。
まぁ、俺にはその流動する《運命》も全て、見えてしまっているけどもな。
見えているが、どこに収束するかはランダムといった感じだ。
この世界は、可能性が無限大となったのだ。
「神託の神ではなくなった俺は、ただすべてを知る蛇にすぎない。アポロン、俺に旅をさせてくれないか？」
「旅…とは？」

「俺を自由にさせてくれと、解放してくれと言ってるのだよ。おれは全てを知っているが、全てをこの目で見たわけではない。暇つぶしにそれらを見に行こうと思ってな。」
「だが…あなたほどの神が…」
「大丈夫だ。所詮、おれは時代遅れの神。ただの蛇さ。それと、そんなに悲嘆しなくてよい。アポロン、お前は十分やれているよ。」
「あなたは…優しいな。」
「いいや、何もかも諦めているだけさ。…それではな、太陽の神よ。またいつか会おう。」

ピュートーンはそう言ってアポロンに埋葬されていた世界の中心の地の底から這い出ていった。
それは暇つぶしの旅。
自分の死により生まれ変わった世界を巡る旅。
たとえその道程も、結末も、全て知っていたとしても。
天蛇は旅をする。
「キュオオオオオ!」
天蛇の咆哮がもう一度、世界に鳴り響いた。

第5話　選択の自由

あれから…どれほどの年月、世界を回っただろうか。
色々なものを見てきた。
だが…その全てを知っていた。
しかたのないことだ。
だが、そのおかげで一つ発見をした。
俺は《選択権》を手に入れていた。
無数に広がる可能性という名の《運命》の枝分かれ。
その全てを俺が知っているわけだ。
以前は神託に従ってその無数の運命を《宣告》し、一つの《必然》に変えることが俺の使命であった。
だが、その使命がなくなったいま、俺はその無数の運命の中から一つ、自由に選べるのだ。
それだけでも、晴れ晴れとした気分で世界漫遊を楽しめるものだった。

哀れな獣は未だに運命に縛られている。
しかし、神託という名の鎖はもう無い。
縛られる運命くらいは、選べるようになっていた。

はるか空の上、輝く雲間である対談が行われていた
「ピュートーンよ、放浪する天蛇よ。その力を見受けて一つ依頼がある。我らに力を貸してくれまいか？」
そう言ってきたのは聖書の神と悪魔の魔王達、あとその配下の上位

の者達あった。
　何やら大戦が起きていて、その中で「二天龍」というドラゴンが暴れているから倒すのを助けて欲しいとのこと。
「異教の人々よ。この老害に何ゆえ助けを求む？」
「皆を救うためだ。たとえこの命に変えてでもな。」
　そう言ったのは魔王のうちの１人。
　いや、次の魔王の１人、か。
　かなりの善人のようだ。
　いや、悪魔の時点で悪人か…
　まぁ、この答えも知っていたけども。
「そうか…フハハ、自分勝手に生き残る為と答えてもよいものを。よほどの阿呆だな。魔王、ルシファーよ。」
「なっ、なにを！それに俺はルシファーではない！サーゼクス・グレモリーだ！魔王様に交渉を任された！」
「良い良い。それもまた一興。底抜けの善人ほど阿呆で良いものはない。…分かった。手を貸そう。俺をその戦場に連れて行け。そしたらそなたらにある《神託》を授けよう。」
「神託…だと？」
　聖書の神が尋ねてくる。
「あぁ、神託さ。ピュートーンという神からの神託だよ。頼りないかな？」
「いや！ありがたい！さっそく戦場へ…」
「いや、待ってくれ。少し伝えたいことがある。」
「なんだ？早くしないと戦場が！」
「まぁ待て、若さは力だが焦りはいただけないな。サーゼクスよ。俺はあくまで神託を授けるだけ。そして、俺が告げる運命は、あくまで《結末》だけということを知っておけ。そこまでの過程は、お主らがその努力で、力を持って決めるのだ。そうでなければ、この戦は意味がないものとなってしまうだろう？それだけは避けねば報われない魂が出よう。」
　威厳をもって、荘厳にそう言葉を発した。

悪魔も、聖書の人々も、息を飲んでいた。
神からの絶対的な要求、警告。
神の、戦死者への気遣い。
そして、戦場にて生きているものへの無慈悲な言葉。
それは神からの試練に等しかっただろう。
「さぁ、戦場へ行こうか。」
結末はわかった。
だが過程はどうなるであろうか。
どのようなパターンを、この者達は選択するであろうか。
天蛇は心を躍らせていた。

「お主らは、運命に打ち勝てるかな?」
そう、問いを発しながら空間転移用のゲートをピュートーンが開く。
その魔力は絶大であり、その場の全てのものが力の差を悟った。
二天龍など足元にも及ばないほどの強者。
全能、万能、そのような言葉がふさわしいほど強大な存在。
「さぁ、覚悟を決めよ。自由なもの達よ。」
その激励は、皆に恐怖と昂りを与えた。
ゲートをくぐり、次々と戦場へと出て行く。
今、ここに二天龍の敗北が決まった。

第6話　必然

ピュートーンがおもむいた戦場はまさに悲惨というべき事態であった。
真夜中の真っ暗な戦場は赤く塗りつぶされていた。
下級天使と下級悪魔、そして堕天使の連合軍が数を武器に二天龍へと立ち向かい、そして薙ぎ払われ、惨殺されている様であった。
堕天使の上位者たちが必死に軍をまとめて抵抗している。
それは命がけの時間稼ぎ。
上位者達が神託を得るまでの時間稼ぎであった。
尊い死だろうか、俺にはただただ可哀想に見えてならない。
俺や、上位者達が戻ってきたことにより戦っていた者達の目に希望が宿る。
無駄ではなかったと。
これで勝てるのだと。
俺は、ここにいる者達全ての運命に敬意を評してこの神託を送ろう。
「悪魔、堕天使、天使、この場にいる連合軍に《神託》を授ける。そなたらの勝利は確定した。存分に戦い、抗い、生き残るといい。」
俺のその《神託》を皮切りに連合軍は勢いづき、二天龍へと向かって行く。
そして戦は、深みへと向かう。

「ピュートーン！大昔に死んだ蛇が！なぜ俺らの邪魔をする！」
赤龍帝がこちらに怒鳴ってきた。

それもそうだろう。
彼らからすると好敵手と戦っているだけなのに邪魔されているのだから。
まぁ、こう答えるしかあるまい。
「それもまた運命だよ、赤龍帝よ。」
「運命だと？ふざけるんじゃない！」
次は白龍皇がそう言ってくる。
そうだな、仕方のないことだ。
この感覚は、俺以外には理解しようもない。
しかし…そうか、やはり俺が死んだことで世界は幾分マシになったと見える。
運命に「くそくらえ」と真っ向から言えるこの時代は、とてもいいものだ。
少し感動しつつ言葉を返す。
まぁ、もう彼らの敗北はすでに確定しているがな。
俺が神託をもたらした時点で。
「そうだろうな。ならば抗え。二天龍よ。その精神性はとても良いものだ。だから抗え。まぁ、それすらも運命だと知り無駄だと悟り絶望することは、無いようにな。」
「ふ、ふざけるナァァ！」
赤龍帝がこちらに怒りを露わにして火球を放つ。
彼の倍化の能力が乗ったとても強力無比な火球だ。
まぁ、ここは力の差を見せつけてやるとしよう。
それもまた一興。
身体に力を溜める。
ピュートーンの体の至る所が青白く煌々と輝き、背中の装飾が轟々と唸りを上げる。
そして…
「キュオオオオ！」
天蛇が鳴き声を一つあげた。
その鳴き声は戦場中に響き、そして…

火球をいともたやすく掻き消した。
二天龍を含めその場のものは唖然とし、そして理解する。
あれこそが《ピュートーン》なのだと。
「さぁ、戦は終わってないぞ？諸君よ。君たちの命運は、君たちの手にあるのだから。その結末を、見せてくれたまえ。」
そして戦は終結へと向かう。

戦は終結した。
魔王四人と、聖書の神の犠牲をもって…な。
勝どきが上がる戦場で一人つぶやく。
「そうか、その運命を…選んだのだな。ならばそれも良いだろう。」
運命の中には、彼らが生き残るものもあった。
例えば俺に泣きついてくるとか。
例えば奇跡が起きて二天龍が弱体化するとか。
色々あった。
だが、彼らは結局、《彼ら自身》でこの問題を解決した。
そこに彼らの上位者たるプライドを感じずにはいられなかった。
と、そうこうしているとサーゼクスが飛んできた。
なにやら浮かない顔である。
「どうした？ルシファーよ。」
「…俺はルシファーでは無い。悪魔の代表として礼を言いにきた。今回の協力、感謝する。」
「協力？俺は協力などしておらんよ。俺が神託なぞ与えなくても、この結果になっていただろうよ。」
「…そうか。」
「焦るなよ。若僧。おまえの前には無数の運命が広がっている。悲惨なものから、幸福なものまで。おまえはそれを自由に選んで生きて行

きゃいい。こうやって、魔王に生かされたのだからな。」
「…言われなくても分かっている。」
気まぐれでお節介をする。
が、あまり意味のないことだったろうか。
彼には壮絶な運命が待ち受けているだろう。
どのような運命を選択するのか、今から少し楽しみである。
…次は堕天使か。
その後は天使だな。
まぁ、どうしてこう俺に礼をしにくるのか。
三大勢力と仲良くなることは悪いことではないから…良いか。
戦場に雲間から光が差す。
夜が明けたのだろう。
歓喜と、悲哀の声が聞こえてくる。
勝利の熱と、死の哀しみは未だ戦士たちの心を揺さぶっているらしい。
そんな中一人呟く。
「エアル…待っているぞ。この、《運命》に縛られぬ世界で」
薄い光が天蛇を優しく包み込んでいた。

第7話　妄想理想夢幻

あの大戦から2日ほど経っただろうか。
暗い洞窟の中で一休みと一人まどろんでいた。
雫の滴る音を音楽がわりに気持ちよく寝ていたら突如洞窟内に大きな声が響いた。
「ピュートオオオン！どこだぁぁぁ！」
怒り狂った声であった。
驚いて寝ていたコウモリたちは飛んでいってしまった。
もちろん来るのは知っていた。
まったく、面倒なものだ。
「ゼウス…様か…」
かつての主神の来訪であった。

大声から程なくして、ゼウスが目の前にいた。
その形相はまさに雷といっていいだろう。
怒りを露わにした神の存在。
怒りのあまりほとばしるいなづまが辺りを照らす。
並大抵のものならば瞬時に気絶しかねないそのオーラの前でピュートーンは何食わぬ顔で佇んでいた。
「ゼウス様、これはこれは。お久しぶりでございます。何用でいらっしゃったのでしょうか？」
「…お主は変わらんな。煽りともとれるそれを真面目にいうところもな。…心配なぞ無用だったか。」
と、ゼウスはそう言って気が抜けた顔をしてそこに座ってしまった。
どこか安堵したようだ。

何をしに来たか…は、知っている。
「お主ならばまぁ、わしが来た理由もわかるだろう？お主の様子を見て問題ないと理解したが一応警告しておく。力をむやみに使うでない。」
「はい、分かっております。」
「そうじゃろうな…呑気に寝てる姿を見ればわかる。お主がその力を悪用、乱用などせんことぐらいな。それと、敬語は使わんで良い。昔みたいに上下の関係じゃあるまいし。すこし話さんか？」
「ありがとう…分かった。」
ゼウスは普段から能天気で温厚な神だ。
そのゼウスがあそこまで怒るならばそれほど危機感を持っていたということだ。
ゼウスなことをむやみに責められないと思う。
俺だって逆の立場ならそうしたからな。
ゼウスは俺が知った無数の運命を俺に命令して一つに変えさせていた張本人である。
まぁ、ゼウス本人も本意じゃなかったようであるが。
俺のあまりに強大すぎる力をどう御そうか考えた結果なのだろう。
それを考えればここに来た理由もわかる。
《運命》をいとも容易く如何様にも変えられる存在が野放しになっているのだ。
これほどの恐怖はないだろう。
まぁ、俺自身はそんなものに興味はないがな。

「お主は知っていることに対して思考がなさすぎんか？さっきも来た理由を知っていたならあんな煽りのような受け答えしなくても良いだろう？」

「まぁ、確かに知っていた。というよりあんな風に答えれば平穏に収まると知っていたからそうした。」
「そうだったな…お主はそんなやつだった。確かにお主の役職からの心労で心が削れたのも分かるしそれはわしの責任でもあるがの、もうちょっと他の物に興味を持て。悪い事は言わない。」
「あぁ…よく分かっているさ。それに…思考ならしてないこともないよ。無駄な思考だけどもな。」
ゼウスとの話はかなり盛り上がった。
まぁ、知っていた内容だがな。
だが、一人でじっとしているよりかは大分救われる時間だ。
他の物と触れ合うことの大切さはエアルが教えてくれた。
先ほどのゼウスからの言葉も何回もエアルから言われたものだ。
俺が世界を諦めて、冷たく、傀儡のように生きていたところにエアルは入ってきた。
毎日俺が知っている話を持ちかけ、知っている行動をし、知っている気遣いをする。
俺が何度拒否しても諦めなかった。
最初の頃は何も感じなかったがいつしかエアルを気に入っていた。
俺も自然とエアルに話しかけて、《知っているのに》楽しむようになっていた。
エアルは、俺に《思われる喜び》と、《思う喜び》を。
人間性を、心を、思い出させてくれたのだ。
そんなふうに懐かしがっていると、ゼウスが真剣な面持ちでこちらに尋ねてきた。
「なぁ、ピュートーンよ。お主はなぜ、今生きておる？お主はこの世に絶望したはず。エアルというお主を救う運命にあった巫女も死んでしまった。何故？何故今もそう笑って生きている。それが分からんのだよ。それが不気味でならんのだ。」
なるほど。
確かにそうであるな。
ゼウスが選んだ運命の筋書きによれば俺は絶望の淵に死に、そして

二度と蘇らないというストーリーだったのだろう。
わざと「エアル」という救いの役職を作り、それが目の前で死ぬのを見せつけて俺をこの世から排除したかったのだろう。
確かに俺はこの世にあるには強大すぎる。
まぁ、皮肉なことだ。
今俺が生きている、笑えている理由もまた「エアル」なのだから。
「そうだな…ゼウスよ。運命を定めていたあなたなら知っていよう。エアルの最期を。エアルは、最後の言葉を残さず去った。つまり、その言葉はこの世に存在しない。一番大切なその言葉は、俺は知ることができないのだ。…故に、俺は考えた。この世にピュートーンとして生を受けた今までの何よりも考えたよ。その、最後の言葉はどんなものであったのだろう?とな。いろいろなことを考えた。感謝の言葉だったかもしれない。謝罪の言葉だったかもしれない。いろいろな考えが頭をよぎったよ。でもな、いくら考えてもだ。エアルが俺に言う言葉は、どれも俺を励ますような、喜ばせてくれるような、俺を心配するような、そんな言葉しか…浮かばなかったよ。俺の妄信、独りよがりだけどな。それで思ったわけさ。死ぬことが、諦めることが、エアルのためにはならんとな。俺は…信じているのさ。いつかまた、この世にエアルが再来して、優しく声をかけてくれるその日を。頑張ったねと、そう言われる日を夢見ているのさ。…妄想さ。エアルが生き返ることなどない。そう知っているよ。理想だよ。甘くて儚い、幻さ。でも、それでいいんだ。それで…いいのさ…」
ゼウスは何も言わなかった。
天蛇の目に涙が浮かんでいるのを見て驚愕していたのだ。
結局、天蛇が泣き疲れて眠るまで二人は動かず、話さなかった。

第８話　逆鱗

俺が起きたときすでにゼウスはある書き置きを残して帰っていた。
「もうお主を縛るものはない。自由に生きろ。」だそうだ。
警告とかが一切書かれてないところにゼウスの心意気を感じる。
しかし、やはり力が強大過ぎると不便だな。
ほかの力のあるドラゴンは人間の姿を借りてその力を隠す、封じるそうだしそれを真似してみようか。
ゼウスが今まで俺が力を制限することを縛っていたからできなかったがやり方はもちろん知っている。
「…ふぅーこんなものかな。」
変身する姿は自由である。
しかし別に美女美男子になりたいわけでもないし精神もじじいなのでおじいさんの姿にしておいた。
力の大半も封じてみたため運命が全く見えない。
初めての体験だが…これはいいな。
まぁ、地球の終わりまでの大筋の運命はすでに知っているのだが一度目の俺の死によりその大筋は崩れたので必ずしもそれを通るわけではない。
つまるところ今の俺はふつうの生物と同じというわけだ。
ゼウスのいうとおり。やはり縛りはなくなっているようである。
もう５０年くらいはこの洞窟で眠って過ごそうかな。

どうやら俺の眠りは妨げられる傾向にあるな。
まだ２０年も経っていない。
確かにこのような運命もかなり昔に見えていたが実現するとは思っていなかった。
端的にいうと堕天使が攻めてきた。
俺の力を欲したのとそれが手に入れられないのであれば堕天使にとって危険だと判断したということだ。
もちろん堕天使のトップである「アザゼル」という人はそんな愚かなことはしない。
堕天使の中でも過激派の奴らがきたのだろう。
正直堕天使は過激派であってももう少し賢いだろうと思ってたが買いかぶりだった。
「お前が…天蛇、ピュートーンか？」
「そうであるが、何用かな？」
堕天使たちはこんな老いぼれがいるとは思わなかったようである。
俺の人間体は能力もふつうの人間ほどなのでそこまで脅威に感じないらしく、俺の答えを聞いた瞬間皆笑い出した。
伝説の存在の正体はこれだったのか、あっけないな、そんな感じなんだろう。
なんとも失礼だな…まぁいいが。
「はぁ？お前がピュートーン？フハハ！アザゼルも腰抜けだなぁ！こんな弱っちいのに手を出すなとかいってみすみす運命を操る能力を逃そうとするとは！」
はぁ…なるほど。
さっきまで寝ぼけていたがようやく思い出してきた。
堕天使はそういえば俺との会合に参加していなかった。
二天龍を食い止める役を買って出たのだ。
悪魔や天使が直接俺の圧を受けたのは会合の時である。
堕天使も、二天龍との戦いの時は俺と一緒にいたが、その時は圧を受けていない。
圧をかけたのは二天龍に向けてだったからな。

それだから俺の恐ろしさを知らんわけか…
さて、どうするべきか。
別に殺してもいいが…今回は見逃してやろう。
「堕天使たちよ、今なら見逃してやる。帰れ。」
「うるせえ雑魚が。雑魚は雑魚らしくしてろってんだ偉そうにしやがって。虫唾が走るんだよ！」
「もう一度だけ警告だ。帰れ。」
「ふざけるな。帰るわけないだろうアホが。」
まったく、聞く耳を持たない奴らってのは煩わしい。
人間化により運命が見れないからこういう不便さを感じてしまうのはデメリットだな。
それに口調は神の仕事していたら染み付いたものだし実際神なのだから問題ないだろう。
あぁ、でも今はただのでかい蛇か。
まぁいい、ちょっと懲らしめてやろう。
天蛇はこの判断を一生後悔することになる。

堕天使達はあれだけ自信があったから少しは骨があるのかと期待していたらそうでもなかった。
数分どころか数秒も持たず敗北を喫し、俺の前に横たわっている。
呻き声が洞窟内に反響しなんとも不快だ。
俺は静かなのが好きなんだが。
堕天使の本拠地にでも転送しようと堕天使のリーダー格に近づく

とそいつは恐怖の表情を向けた。
歪んだ醜い顔だった。
それは死を悟った顔だった。
それでも生を諦めぬ顔だった。
「ま、待ってくれ！ある条件を出す！お前にとっていいことのはずだ！だから命だけは助けてくれ！」
その堕天使は命乞いをしだした。
別にそんなものしなくとも命は奪わないつもりであったがその条件とやらに少し興味が湧いた。
俺を喜ばせるようなものは今現在この世に存在しない。
むしろどれだけ興味の湧かないつまらないものなのかという点に興味が湧いた。
まぁ、すぐにその興味も失せたが。
早く転送しようと近づくが、その堕天使は後ずさりしながら命乞いを続ける。
「逃げるな。」
「待ってくれ！条件を話すから！この堕天使を渡す！好きにしていい！」
その堕天使のリーダー格は近くに気絶して転がっていたある堕天使を指した。
うつ伏せで顔は分からないが黒髪の少女だった。
「それになんのメリットがある？いいから抵抗するな。」
「この堕天使はな、天界に伝わる禁忌を使って俺が転生させたんだ！その魂はお前の最愛の…ピギュッ！」
言葉の途中で堕天使の頭は吹き飛んだ。
俺が吹き飛ばした。
右腕を思い切り振り抜いただけで飛んで行った。
ドチャッグチャッと飛んでいった首が不快な音を出す。
殺した理由は簡単だ。
言葉の意味を途中で理解した。
理解してしまった。

そして後悔した。
人間の姿になったことを。
運命を見る力を封じたことを。
悠長な選択をしてしまったことを。
即刻殺すべきだったのだ。
自由という名の罠にまんまとはまり、冷静さを失っていたのだ。
浮き足立っていた。
それだけはしたくなかった。
して欲しくなかった。
奴は俺が喜ぶと思ってやったのだろうか。
分からん。
力を封じている俺には分からん。
とりあえず近くに転がっていたその少女の元へ行き、その顔を持ち上げてみた。
「…クソが。」
その顔はまさしくエアルであった。
エアルそのもの。
俺の中に憤怒が渦巻く。
奴を一瞬で殺してしまったことを後悔した。
もっと苦しめればよかった。
奴は今、俺の夢を壊したのだ。
生きていればまたエアルに会えるという実現不可能な夢を。
夢というのは中途半端に叶うと余計に冷めるものだ。
この少女はエアルの魂と容貌を持つが、エアルではない。
エアルの記憶や人格、雰囲気などは全くもって併せ持っておらず、魂と側だけ一緒というエアルでありエアルならざるものなのだ。
エアルが、完全に、そのまま俺の前に再び現れるということは未来永劫ありえない。
奴は、俺に現実を突きつけたのだ。
この少女の存在をもってして。
「……殺せるわけ…ないだろう…」

その少女を殺そうとしたが、できなかった。
頭ではそれがエアルではないと理解しているのに、体が拒否するのだ。
その魂や容貌に騙されて。
エアルの転生という事実を知ったせいでためらいが生まれていた。
こうなることを理解していた。
知っていたからエアルの転生体が現れることだけは阻止しようと、そう考えていたのに。
少しの油断で、運命を見る能力を絶ったために。
この可能性も見えていたのに対処を怠ったがために。
辛い現実が目の前に横たわる。
「くそ…甘い妄想でもいいじゃないか…夢を見させてくれたって…いいじゃないか…エアル…」
天蛇の小さな嘆きが洞窟内に響くことはなく、あたりはとても気持ちの悪い静寂に囲まれていた。
天蛇がエアルの偶像にすがることは、もうできない。